

王子さまの梅干し

桃子

キヌ

王子

森田

N (ナレーション)

N 〈願い事をする時は、気をつけた方がいい。叶ってしまうかもしれないから〉

「梅御殿<sup>うめじてん</sup>」と呼ばれるその古いお屋敷は、見渡す限りの梅林に囲まれていた。

樹齢百年はくだらないと言われる見事な梅の木の群れは、花の季節ともなれば、白やピンクや<sup>くれない</sup>紅の霞<sup>かすみ</sup>に梅御殿全体をけぶって見せ、<sup>こがね</sup>黄金色の実が枝もたわわになる頃は、清らかな甘い香りで道ゆく人を酔わせてみせた。

この種の神秘の御殿には、当然美しいお姫様が住んでいる。

梅御殿の女主人、キヌさんがその人だ。

由緒正しい大地主の一人娘に生まれ、「梅園<sup>ばいえん</sup>の美姫<sup>びき</sup>」の名を欲しいままにした見目麗しい貴婦人である。ただし、現在は七十歳を越えている。

しかし、その気品あふれる美貌は今なお色褪せることがない。うっかり見とれて、血圧の上昇や激しい動悸に見まわれる男性諸氏が後を絶たず、ご町内の老人会では、「命が惜しければ、キヌさんを見つめ過ぎないこと」が暗黙の了解事項となっていた。「時に美しさは毒にもなる」というわかりやすい例である。

もう一人の住人については、取り立てて華々しいプロフィールが見当たらない。強いて言うなら「桃子」という名前には、なかなかの愛らしさがある。

草木染めの作家を名乗ってはいるものの、ただの熱心な趣味と言われても反論の余地がないほど、収入には結びついていない。梅御殿の離れを仕事場兼住居としているが、破格の家賃すら滞ることも度々という痛ましい経済状況にある。

二十九歳にもなってこの暮らしぶりはいかかなものかと、本人も発作的に思い悩むことはあるらしい。けれど一晩ぐっすり眠ると、例外なく爽やかに朝を迎えてしまう。「金もないが悩みもない」というわかりやすい例である。

育った環境や年齢が大幅に違うにもかかわらず、彼女たちは大変に気が合った。

ただの大家さんと間借り人という関係を超えて、楽天的な女性二人は気の置けない友人同士のように、つかず離れずさりげなく、梅御殿での暮らしを楽しんでいた。

N 午前中の陽射しが強い七月の土用の日。梅御殿の敷地内にある土蔵の中にいるキヌと桃子。

桃子 あー涼しい。ずーっとここにいたい。あたし涼しい時が一番幸せ。美味しいもの食べておなががいっぱいな時の次に一番幸せ。

キヌ 桃ちゃん。「一番」の使い方が間違っついていてよ？

桃子 暑さと金欠で左脳がうまく働かないのです。

キヌ またそんなお家賃の取りづらいことを言っつて。話題をそらすためにあとで西瓜を食べさせてあげるわ。

桃子 話題をそらすためなら今すぐ食べさせてください。

キヌ さつき井戸に落したばかりですもの。梅の天日干しが終わった頃には冷えていますよ。それに汗をかいたあとの方が美味しくいただけるでしょう？

桃子 そうですか。ビールを美味しく飲むために、炎天下でマラソンをした挙句、救急車で運ばれる人もいますからね。

キヌ 私の言いたかったこととほのかに違うような気がするわ。本当に頭がうまく働いていないのね。

桃子 実は、ちよつと面白くないことがありますよ……。

キヌ あら、お気の毒に。ではまず梅干しの甕かめから重石を出してくださる？

桃子 ……なにがあつたのか訊いてもいいんですよ？

キヌ また染物が返品されたとか、森田君とケンカしたとか、そんなところではなくって？

桃子 ……そんなところですよ……。

キヌ どちらも今に始まったことではないでしょう。

桃子 返品の方はその通りですけど、森田とはもう絶交です！ あんな男、大嫌いになりました。

キヌ 嫌いな人との付き合い方を教えてあげるわ。まず、できるだけ距離をもつこと。そしてここからが大事中の大事で、決してその人の不幸を願わないことよ。おわかり？

桃子 キヌさんて……恐ろしくさばさばした方ですね。その爽やかさの秘訣はなんですか？

キヌ 梅干しをいただくことかしら。後口がさつぱりするでしょう？<sup>あとくち</sup> ほら、そのためにも早く天日干しの準備にかかりましょう。

桃子 その前にこの布をもらってもいいでしょうか？

キヌ あら、どこからそんな古いものを。

桃子 奥にあった箆笥の中です。タマネギの皮で染めたらいい味が出そうでしょう？ これとタマネギの皮をセットでいただけたら、あたし、キヌさんに慰めてもらったような気になれます。

キヌ タマネギの皮は今朝ゴミに出してしまっただけ……。

桃子 なんてもったいないことを！

N 桃子の非難に動じることもなく、キヌは古い布をじっと眺めている。

キヌ ……ちよつと広げてごらんなさい。

桃子 六尺はありますよ。

キヌ 六尺ということは……。それ……下帯ではないかしら。

桃子 下帯？

キヌ フンドシだと思うわ。私の父の。

桃子 フンドシ……。フンドシか……。

キヌ 桃ちゃんさえ構わないのなら……。どうぞ？

桃子 ……ありがとうございます。お父様だと思って大事にします。

キヌ フンドシを父だと思われるのは、複雑な気持ちがあるわ……。

桃子 ここは掘り出し物の宝庫ですね。ほら、こんな素敵な絵も見つけましたよ。

キヌ まあ！ 懐かしい1

N キヌは桃子が差し出した小さな額縁の絵を手を取った。

そこには中世の王様と女王様らしき人物が描かれていた、古い絵の中の二人は、赤い果実があふれんばかりに入った大きな壺を仲良く手に持っている。

キヌ 父がヨーロッパに留学していた時、骨董市で見つけた物なの。このお姫様の顔が母にたいそう似ていたからと言って。

桃子 お母様、すさまじい美人だったんですね。そう言えば、キヌさんにも似てるかな。

キヌ 大事にしていたのに、どこかに取り紛れてしまったとあきらめていたのよ。

ありがとう桃ちゃん。気持ちばかりのお礼に、桃ちゃんのささやかな幸せを祈らせてちょうだい。

桃子 どうせだったら大いなる幸せを祈ってください。

キヌ そうだわ、いいものをあげましょう。

N 梅干しの甕が並ぶ棚の中から、ひときわ古い甕を持ち出してきたキヌは、蓋を開けて中を覗きこむ。

キヌ よかった。ひとつきり残っていたわ。

桃子 なんですか？

キヌ 申年さるの梅干しよ。申の年に漬けた梅干しは厄除けになるとかで、昔は病人のあるお宅に分けて差し上げたりしていたの。

桃子 あたし、体だけは悲しいほど丈夫なんです。

キヌ お薬になるだけではなくってよ？ 梅干しの種を割った中に、白くて小さな粒が入っているのをご存じ？ 私たちは「天神様」なんて呼んでいたけれど。

桃子 知ってますよ。よく食べました。日の丸弁当のデザートとして。

キヌ その粒を食べる時に願い事をするよ……。

桃子 まさか叶ってしまうとか？

キヌ 我が家ではそう言い伝えられていたわ。江戸時代に漬けられたこの梅干しは、特に靈験あらたかで、たいていの願いを叶えてくれると珍重されていたの。

桃子 江戸時代！

キヌ いわゆるヴィンテージ物ね。これが最後のひとつだけけれど、桃ちゃんにお譲

りしましょう。

桃子 ……梅干しとは思えないほど、黒ずんでいるようですが……。

キヌ 二百年以上前のものですからね。

桃子 ……キヌさんも召し上がったんですか？ この、小石にしか見えない代物を。

キヌ いただきましたよ。子供の時分に。

桃子 願いが叶いました？

キヌ ……どうだったかしら。

桃子 どうだったかしらって……。

キヌ なにしろ大昔のことですもの。なにをお願いしたのかも忘れてしまったわ。

桃子 まあ、これも人性経験のひとつですから、ありがたく頂戴します。（と、口に

放り込む）

キヌ いかが？

桃子 ……得も言われぬ、込み入ったお味が……。

N しばらく梅干しをしゃぶってから、桃子は口から出した種を割り、小さな中身を取り出した。

キヌ さあ、なんでも好きな事をお願いしてごらんさい。

桃子 それではだまされたと思って……。

キヌ 不心得者は天神様に嫌われてよ？

桃子 では、お言葉に甘えて遠慮なく。えーっと、白馬に乗った王子様が、早く迎えに来てくれますように！（と、天神様を飲み込む）

キヌ はい、ではお仕事に戻りましょうか。

桃子 余韻を味わったりはしないんですか？ あまりあっさりやりとげるのも不心得な気がしますけど。

キヌ だってなんだか外が暗くなってきたようよ？ 天気予報がはずれたのかしら。

N 桃子とキヌが外の様子をうかがうために土蔵を出ると、辺り一面が真っ白な霧に覆われていた。

桃子 なんだこりゃ。まるで雲の中ですよ？

キヌ これでは天日干しは延期だわ。

桃子 仕方ありませんね。泣く泣く西瓜でもいただきますしよ。

キヌ ……。馬？

桃子 ……はい？

キヌ 今、馬の鳴き声が聞こえなかった？

桃子 キヌさん、大丈夫ですか？ 一〇三ひく七がいくつかわかりますか？

キヌ 九十六でしょう？ それはなんのおまじない？

桃子 呆け診断の簡単なテストです。ああ、キヌさん！ 正解は九十三ですよ！ お年のわりにまだこんなに若くてお美しいのに！

キヌ お褒めのお言葉ありがとう。でも残念ながら一〇三ひく七は九十六よ？

桃子 (指を使いながら) 九十六？ あれ？

キヌ (憐れみ深く) 桃ちゃん……。

桃子 暑さと金欠のせいで左脳が……。

キヌ まだ三十歳なのに……。

桃子 まだぎりぎり二十九です！

キヌ その若さで私より耳が遠いとおっしゃるの？ ほら、聞こえなくて？

N 遠くから蹄ひづめの音が近づいてくる。キヌと桃子が不審そうに耳を澄ましていると、やがて濃い霧の中から、白馬に乗った王子様が二人の前に姿を現した。

美しい卷毛とマントを風になびかせ、白馬に堂々とまたがったまばゆいばかりの王子様から、キヌと桃子は目が離せないでいた。

桃子 あれは……王子様ですよ？

キヌ 絵に描いたような王子様だわねえ。

桃子 ……あたしの王子様ですか？

キヌ さあ……。ご本人にお伺いしてみたら？

桃子 無理ですよ。どこから見ても外国の方じゃないですか。

王子 わたくしをお呼びでございますは、いずれの姫君にあらせられましょう？

桃子 ……なのに日本語を喋っている……。

王子 (自分の言葉がうまく通じていないのかと思い、より丁寧に) ご無礼の段、平にお許しを。畏れながら重ねて言上ごんじょう仕ります。此度こたびわが王家へお興し入れくだ

さいます姫君が、こちらにおわします事と存じ居り候えば……。

桃子 でもほとんど意味がわからない……。

キヌ つまりね、こちらの王国へ、お嫁入りしてくれるお姫様がいると思ったって仰ったのよ。

王子 (ほっとして嬉しそうに) 左様にございます！

桃子 この状況で冷静に通訳ができるキヌさんを、あたしは好きです。

キヌ 私に告白している場合ではなくってよ？

王子 (恭しく) 永らくお待たせ申し上げました。

桃子 むしろ早過ぎたくらいですが……。

王子 なにぶんにもはるか遠国より参りましたため……。」

桃子 ……あの、あたしを迎えに来てくれたんですか？

王子 ……(ややオドオドと) わたくしをお呼びくださいましたのは……あなた様では？

桃子 呼びましたけどね。確かに。

王子 ならば相違ございません。仰せのままにお迎えにあがりました。

桃子 そんなタクシーのような気安さでいいんですか？ 一国の王子様ともあろう

お方が。

王子 姫。

桃子 桃子です。

王子 桃子殿。わたくしのお妃になってはいただけませぬか。

N 自分の前にひざまずく王子の姿を桃子はじっと見つめていたが……。

桃子 キヌさん……。

キヌ なんですか？

桃子 (でれでれにだらしない顔で) プロポーズされちゃった♪

キヌ 失礼ですよ？ 大事なお話の途中で。

N 桃子はでれでれにだらしなかった顔を真顔に引き締め、王子に向き直った。

桃子 (真剣に) ひとつ訊きたいことがあるんですけど。

王子 なんなりと。



桃子 あたしのこと、どう思います？

王子 ……（言葉につまりつつも）ブロンズと、見まがうばかりの肌もまぶしく…  
…うらやむほどの丈夫なお身体を…お持ちのことと拝察いたしますが…。

桃子 （深いため息をつき）丈夫は丈夫なんですよ…。でもこれはねえ、好きで日に焼けてるわけじゃないんです。草木染めだけではなかなか食べていけないもので、不本意ながらあちこちで庭仕事のアルバイトをしているからなんです。まあ、仕事のあいまに染物の材料をタダで拾い集められるから、一石二鳥と言えないこともないんですけどね…。でもそのせいで、ご近所の人はもれなくあたしの本業を「草むしり」だと信じているんですよ。

キヌ 桃ちゃん、そういう涙なくして語れないお話はあとでゆっくり…。

桃子 （ハッと）いつの間にこんなやるせない身の上話に…。そうではなくて、王子様は、あたしのが好きですか？

王子 ……お慕い…。申し上げます。…。これから。

桃子 （不満そうに）これから？

キヌ 少し調子に乗り過ぎではなくて？

桃子 だってせっかくなら恋愛結婚がしたいです。

キヌ それを言うなら、桃ちゃんの方はどうなの？

桃子 はい？

キヌ ただ愛されてお嫁入りすることを恋愛結婚とは呼ばないわ。桃ちゃんもこちらの王子様のことを離れがたいほど好いておいでなの？

桃子 今会ったばかりで離れがたいかと言われても…。

王子 （消え入りそうな声で）わたくしを…。お望みくださったのではなかったの  
でございますか…？

キヌ ほら。王子様、傷ついてしまわれた。

王子 あなたのお声だけを頼りに、長い旅路を経てこうして参りましたものを、ようやっとお会いできましたるこの期に及んで、お心変わりとはあまりにむごいお仕打ち…。わたくしのどきがお気に召さないのをごいませしょう？ わたくしが美しすぎるからですか？ 白いタイツを履いておりますためですか？

桃子 いや、王子様はやっぱり美しくてタイツを履いていなくっちゃ。

王子 ならばどうかわたくしとご一緒に！

桃子 でもそんな文句のつけようのない王子様が、なぜよりによつて貧しい三十路女なんかを嫁に欲しがるのかと……。正確にはまだ二十九ですが。

王子 またでございますか……。

N がつくりと膝をつく王子。そんな王子を慰めるかのように、白馬が小さくひと声鳴いた。

王子 (打ちひしがれたまま) 身分が違いすぎるだの、国際結婚は自信がないだの、ガラスの靴を履いた娘か七人の小人と暮らしている色白美人をお探し遊ばせだの……いずれの姫君も、様々な理由を口になさる……。

桃子 いずれの姫君？

王子 それでも皆、異口同音に、「ずっとあなたを待っていた」と仰る……「お会いできて嬉しかった」と言ってくくださる……。されど誰一人とて、わたくしと一緒になんてはくださらない……！

桃子 ……お悲しみのところすいませんけど、要するに、プロポーズするのはあたしが初めてじゃないんですね？

王子 (ハッと我に返り) お気を悪くされましたか！

桃子 それほどでも。で？ あたしは何人目？

王子 ……。桃子殿が……九九九人目の姫君にあらせられます……。

桃子 九九九人目……。切りがいいような、悪いような……。

キヌ どうしてこの方のような非の打ち所のない王子様が、そんな憂き目におあいになるのでしょうかねえ。

王子 これは……呪いなのでございます。

キヌ それは大変お気の毒なことでございます。

王子 ……いかなる呪いかお尋ねにはならないのですか？

桃子 キヌさん。その淡白さ、どうにかありませんか。

王子 特段、ご興味がおありでないのなら……。

桃子 興味ありますよ！ だって呪いでしょう？ さ、さ！ お話してください！（手

拍子をしながら)の・ろ・い! の・ろ・い!

王子 ……そこまでご期待いただくほどの謂れでも……。

桃子 (興ざめして)話したいんじゃないんですか?

王子 おふた方のご興味には、あまりに激しい温度の差が見受けられますゆえ……。

キヌ 口はばつたいことを申し上げるようですが王子様、もう少し主体性をお持ちになつてもバチは当たらないのではございませんか? お国を司るお立場から、

しもしも下々の望みに応えようとなさるご姿勢は大変ご立派なことと存じますけれど、それも度が過ぎますと、お相手の顔色をうかがうばかりの臆病ととられかねません。

桃子 いきなりお説教ですか。

キヌ 花嫁探しにしてもそうです。望まれてご結婚なさるのは結構なことですが、王子様ご本人も、心から望まれる方とご一緒になられることを、老婆心ながらお勧めいたします。人の上に立つ者は、わがままを抑えなければなりません。せめて人生の苦楽を共にされるご伴侶は、本当に愛する方をお選びなさいませ。

桃子 ……それとなく、あたしと結婚するのはやめておけと言ってます?

キヌ ものの道理を申し上げたまでです。

王子 ……(キヌの言葉に深く感じ入りながらも)呪いの話に戻つてもよろしゅうございませうか?

桃子 危うく忘れるところでした。どうぞ。

王子 現在、国王であるわたくしの父は、もとはしがな森の番人でございました。

それをわたくしの母、当時の国王の娘に見初められ、やがて王位を継ぐこととなつたのでございます。

桃子 逆玉ですね。

王子 ぎやくたま?

桃子 「逆玉の輿」の略語です。

王子 なるほど。勉強いたしました。その逆玉に乘りました父には、森の魔女と称される恋人がおりました。

キヌ 裏切られた森の魔女が、生まれてきた王子様に呪いをかけたというわけですね。

王子 ……この逸話は、すでに異国の皆様にも広く知れ渡るところとなっておりますのででしょうか？

桃子 キヌさんはいつもこうなんですよ。一緒にサスペンスドラマを見ていても、まだ事件が始まらないうちに「この人が殺されるのね」とか「きつとこの女性が犯人よ」とか、涼しい顔で人の楽しみを奪うんです。

キヌ でもはずれたことなんてないでしょう？

桃子 尚更タチが悪いじゃないですか。

王子 ……ご推察の通り、魔女は呪いをかけました。「生まれてくる王子は、その迎えを待つ姫君を探して、一人諸国をさまようこととなるだろう。そして王子が妃を連れ帰らない限り、この王国は滅びるだろう」と。

桃子 そんなに難しい呪いでもないような気がしますけどね。王子様を待ってる女の子は星の数ほどいるでしょうし。

王子 わたくしも初めは安易に考えておりました。それでも念には念を入れ、世界中の言葉を覚えもいたしました。

キヌ それはお骨折りでしたこと。

桃子 日本語の教科書はちよつと古かったみたいですが。

王子 しかし結果は申し上げました通りです。確かに多くの姫君が、白馬にまたがった王子の迎えを待っておいではなる。されどその王子とは、飽くまでつかみどころのない夢の中の御仁ごじんでしかない。わたくしという人間をお望みくださっているのではないのです……。わたくしを望んでくださる方など、世界中のどこにもおられないのです……。わたくしが至らないばかりに、我が王国は滅びてしまふ……。 (シクシクと泣き始める)

桃子 泣いちやった……。

N キヌが王子にハンカチを差し出す。

キヌ 涙をお拭きなさいませ。

王子 かたじけない……。

キヌ 私の父はこう申しておりました。殿方が泣いてもよいのは、愛する人と別れる時と、財布を落した時だけだと。

王子 お恥ずかしいところをお見せいたしました。(気を取り直して) 桃子殿。呪われし身の上に重ねて、婦女子のご要望に添うところのないふつつか者ではございませんが、どうかわたくしのお妃に……。

長い長い沈黙。

桃子 キヌさん……。

キヌ なんですか？

桃子 お世話になりました。(深深と頭を下げる)

キヌ 本気？

桃子 芸術家に二言はありません。

キヌ 桃ちゃんは芸術家だったの？ 私はてっきり職人さんだとばかり……。

桃子 まさかキヌさんまであたしをただの草むしりだと思っていたんですか？

キヌ ただの草むしりでは職人さんとは言えなくてよ？ 植木職人というのはもつとこう……。

王子 お待ちください！ またお話があらぬ方向に！ それでは、桃子殿……。

桃子 あたし、王子様についていきます。

王子 (狂喜して) 誠にございますか！

桃子 こんなに誰かから望まれることなんて、もう一生ないと思いますから。第一、見ていられませんよ。こんなとびっきりのハンサムがフラれ続けて泣いてるなんて。もつたいないもつたいない。

キヌ またいつものもつたいない病？

桃子 違います。これは人助けです。

王子 ありがとうございます！ ありがとうございます！

桃子 救世主だと思って大事にしてくださいね。そして海外旅行に連れていってくださいね。世界中の言葉が話せるんでしょう？

王子 思し召しの通りに！ 誠心を尽くしてお守り申し上げます！

キヌ 森田君のことは？

桃子 なぜここで森田が出てくるんですか。

王子 (不審そうに) 森田君? それはいかなるお方で……?

桃子 いかなるお方でもありません。

王子 (不安に怯え) 以前にも、いざ出立という段になって、かつて恋仲にあったという青年に姫君を奪い返された過去が……。

桃子 ただの知り合いです。ここを借りる時に世話になった不動産屋の営業マンっただけですよ。

王子 (ホツとして) 穿<sup>うが</sup>つたことを申しました。それでは早速参りましょう! アロー号! これへ!

キヌ 少しお待ちくださいませ。今、梅干しを持ってまいりますので。

王子 ウメボシ、とは?

キヌ 古来より我が国に伝わる漬物でございます。(桃子に) 桃ちゃんと一緒に初めて漬けた梅干が、今年で丁度三年目の食べ頃でしょう? ここでの思い出に、持つておいきなさい。

桃子 (ふとなにかを思い出し) あ! やっぱりダメだ!

N 桃子の言葉に、崩れ落ちそうなほど激しいダメージを受け、今にも泣き出しそうな王子。

桃子 ダメダメ! やっぱり今日は無理!

キヌ 王子様、先ほどご注意申し上げましたね? 殿方が泣いてもよいのは……。

王子 (涙声で) しかしながらわたくしは今、財布を落したような気持ちでいっぱいにございます……!

桃子 行かないなんて言ってますよ。でも今日はダメ。

王子 時が経てば、明日という日も今日になってしまいます……。

桃子 そんな屁理屈をこねているんじゃないですか。まだ仕事が残ってたんです。

キヌ 無事にお済みではなかったの? 今回は返品を防ぐために少なめの納品にして……。

桃子 注文が減ってるんだから無事じゃないんです。イヤなことを思い出させないでください。

キヌ わかった。井戸で冷やしている西瓜を食べてしまいたいのね？

桃子 それのどこが仕事なんですか。思い出したついでにもちろん食べていきますけれども。

王子 そのお仕事とやらを終えられるまでに、わたくしは幾日お待ち申し上げますねば……。

桃子 三日間。

キヌ ああ、梅干し？

桃子 そうです。そもそもあたしたちは三日干しの準備をしていたんですよ？

キヌ そう言えばそうだったわね。

桃子 しっかりしてください。百六ひく七がいくつかわかりますか？

キヌ 九十九。

桃子 ああ！ キヌさん。あたしがお嫁入りするショックでやつぱり……。

キヌ 百六ひく七は九十九よ？

王子 わたくしの勘定でも九十九かと存じますが。

桃子 九十六じゃありませんでした？

キヌ 今度は問題の方を間違えてしまったようね。

桃子 ……マリッジブルーのせいか、また左脳が……。

王子 無理問答をお楽しみのところ失礼かとは存じますが、して、その三日干しとやらは、いかなるお仕事にございましょう？

キヌ さきほど申し上げました梅干し作りの仕上げの作業でございます。梅の果実を塩漬けにいたしました後、三日三晩、天日と夜露にあわせて干すのです。そうすることで日保ちもいたしますし、甘味も増すと申します。

桃子 七月の土用の頃にその天日干しをするのが、あたしたちの恒例行事なんです。これだけはきちんとやり遂げたいんですよ。感謝の気持ちを込めて。

キヌ そうね。こうして王子様と出会えたのも、梅干しが願いを叶えてくれたおかげですものね。

桃子 あたしが感謝したいのはですね……。

王子 梅干し様を取りもってくださったご縁とあらば、わたくしも報謝の念を表さ

なければなりませんまい。及ばずながらお手伝い申し上げます。

キヌ 三日間もおつきあいいただいてよろしゅうございますの？

王子 ……（不安げに桃子に）きつとご同道くださいますね？

桃子 未来の妻を信じてください。ほら！ 陽射しが戻って来ましたよ？ 天があたしたちを祝福するかのよう！

王子 （気をよくして）それではいざ、三日干しをば！

キヌ その前にひと息いれましょう。王子様も長旅でお疲れでございますか？

おむすびをこしらえてございますので、よろしければお召し上がりくださいませ。

3

N おむすび、梅干し、香の物や西瓜などが並ぶ母屋の縁側で、キヌと桃子と王子の三人がお昼をともにしている。

桃子 はい。これが噂の梅干しですよ。

王子 これはなんと色あでやかな。

桃子 まあ、ひとつお試してください。

キヌ ほんのお口汚しでございますが。

N 王子は恐る恐る梅干しを口に運ぶ。

王子 んーっ！

桃子 酸っぱいでしょう？

王子 加えて強烈な塩気が……。

桃子 だからごはんが進むんじゃないですか。さき、すかさずおむすびを。

王子 頂戴いたします。

キヌ 近頃は塩分を控えたものが好まれるようですが、我が家では昔ながらの製法を守っておりますもので。

王子 （せかさされるままにおむすびをむさぼっていたが）！ またも同じ衝撃が！

桃子 中身が同じ梅干しですからね。



王子 (ゆっくり味わいながら) なるほど。なかなか滋味に富んだ食物にございませぬ。

キヌ ご一緒にお茶もどうぞ。

王子 (お茶を飲み) これもまた絶妙な取り合わせで。

キヌ やはり梅干しにはお番茶がなによりかと。種にお気をつけくださいませね。

桃子 そうだ、種、種！ 食べちゃダメですよ？ 出してください。キヌさん、ペ

ンチ、ペンチ！

N 桃子は、王子が出した種をペンチで割り、小さな白い粒を取り出す。

桃子 (神妙に) これが、願いを叶えてくださる神様です。

王子 (ひれ伏して) この度はまたとないご縁結びのご厚情、心より御礼申し上げます。

桃子 あたしたちのお仲人さんをしてくれた神様は、すでにあたしの胃袋の中です。

キヌ 王子様もなにか願掛けをなさってはいかがですか？

王子 わたくしが？

キヌ 種の中身を味わう際のお遊びのようなものですけれど、今回のような思いがけないことが起こらないとも限りませんし。

桃子 願い事は決まりましたか？ はい、あーんして。

王子 ……。(考えに考える)

桃子 なんでもいいんですよ？「泣き虫を治してください」とか。

王子 ……それでは。

N 王子があーんと大きく開けた口の中に、桃子は白い粒を放り込む。

王子 わたくしの妻となられますお方を、幸せにして差し上げられますように。

桃子 あらあ。すいませんね、気を遣っていたいで。

N そこへ森田が大きなごみ袋をサンタのように担いで現れる。

森田 キヌさん！ 来たよー！ あれ！ 外人さんだ。ハイイ！ ハウドウユド  
ウ！

王子 How do you do?

森田 ハウアーユー！

王子 I. ≡ fine thank you. It's great to meet you.

森田 オレ、英語はわかんないんだよねー。

桃子 だったらフレンドリーに話しかけんな！

キヌ 大丈夫ですよ。こちら様は大変見事な日本語をお話しになるから。

森田 そうなんだ。コンチワ。森田です。

桃子 なにしに来たのよ！。

キヌ 私がお呼びしたのよ。

桃子 なんですと？

王子 森田殿……と申されますと、先ほどのお話の……？

森田 まいったなあ。梅御殿はオレの噂で持ちきり？

桃子 誰があんたの噂なんかするか！

森田 桃ちゃん、まだ怒ってんの？

キヌ ずいぶんお早かったこと。

森田 半休もらって飛んで来た。(目を輝かせながら辺りをきよろきよろ見回し)

で？ 馬は？ 馬どこにいんの？

王子 アロー号のことでございましょうか？

N 王子の声に、白馬が姿を現す。

森田 ひゃーっ！ 真っ白ーっ！ キレー！ かつこいいー！

キヌ 王子様にご滞在いただく間、馬のお世話をする者が必要かと思いましたがもので。

王子 恐縮至極に存じます。アロー号にまでお気遣いいただきまして。

森田 (うっとりとおまえ、「タロー」っていうのかあ。

桃子 いわないよ！

森田 オレが昔飼ってた犬と同じ名前だ。

桃子 あんたが飼ってた犬は「桃太郎」でしょ！(キヌと王子に) こいつはあたしに初めて会った時も同じことを言ったんですよ？「桃ちゃんかあ。うちの犬と同じ名前だ」って！

森田 だって桃ちゃんは顔まで桃太郎にそっくりなんだよ？

桃子 嬉しくない！（王子に）大事な馬にバカがうつってしまいます。追い払いましょう。

キヌ 森田君は学生時分に牧場で働いた経験があるそうです。ご覧の通り、動物に対する愛情深さは並大抵のものではございませんし。

森田 そうだよ。オレはタローのために、会社からこれだけかき集めてきたんだぜ？

桃子 なにそのでっかい袋。ゴミ？

森田 シュレツダーにかけた紙。

桃子 ほんとにゴミか……。

森田 これはタローのベッドになるの！ さすがの梅御殿にも敷き藁なんてないでしよう？ これがあれば馬はゆっくり休めるからね。

キヌ 森田君、お仕事にもそれぐらい気を利かせられれば、さぞ成績もあがるでしょうに。

王子 （森田に）ご好意痛み入ります。よろしくお頼み申し上げます。

森田 まかしといて！

キヌ それでは裏の東屋あずまやにお支度をしてはどう？ あそこなら井戸も近いし。

森田 わかった！ いくぞ？ タロー。

N 軽い足取りでタローを連れていく森田。

王子 ……（ほとんど感動して）わたくしが何者であるかには……見事にご関心を払われませんでしたね……。

桃子 すみません、本当に失礼な男で。あれでも今年で三十になるんですが、精神年齢は十歳に満たないんです。

王子 この国の人々は、誠に寛容なお心を持っておいでになる……。

桃子 この国の人間がみんなあんなふうだとは思わないでください。

キヌ そう言えばここへ集まってくる人は、桃ちゃんを筆頭に押しなべてお気楽な方ばかりのような……。

桃子 お気楽の親玉はキヌさんですよ？ 類が友を呼んでいるだけです。

キヌ 細かいことはよろしいじゃないの。さあ、西瓜を召し上げれ。

桃子 やっぱり細かいことはいいんじゃないですか。

キヌ 日の高いうちに作業を始めてしまいましょう。  
王子 ……少なくともこちらの皆様は、実におおらかでいらっしやる……。

4

N 梅干しを干す作業のために、庭に出てきたキヌと桃子と王子。

三人はお揃いの麦藁帽子をかぶっている。

キヌ これより三日干しを始めます。竹ざるのご準備はよろしくて？

桃子 イエッサー！ 熱湯をかけて消毒済みです。

キヌ 結構です。王子様。

王子 はい！

キヌ 麦藁帽がとてもお似合いでございます。

王子 光栄に存じます。

桃子 陶器のような美しいお肌にシミができれば大変ですからね。

キヌ ではみなさん、焼酎でお手を湿らせてくださいませ。これも消毒でござい  
ます。梅干しに雑菌は大敵でございますので。

N 三人はちゃぶちゃぶと焼酎に手を浸し、そのまま自然乾燥させるため、両手を  
幽霊のように持ちあげてしばし待つ。

王子 (桃子の指を見て) 桃子殿、その指先はいかがなされました？

桃子 は？

王子 (心配そうに) なにやら不吉な色に黒ずんでおいでです。もしやなにかの呪  
いでは……？

桃子 (がつくりと) 染料がとれないんです……。お嫁に行くまでには落しますか  
ら。

王子 これは不用意なことを申しました。

桃子 不吉な色……。返品の原因はそれか……。

キヌ 王子様は白魚のような美しいお指をしていらっしやいますこと。

王子 働くことの尊さを知らぬ、お恥ずかしい手にございます。

キヌ 今から存分に働いていただきましてよ。さあ、ざるの上に梅干しをお並べください。互いが重なることのないように、梅の皮が破れないようにそつとお願いいたします。

N 三人は黙々と梅干しを並べ始める。そこへ上機嫌の森田が鼻歌を歌いながら戻ってくる。

森田 ブラシかけてやったらすごく気持ちよさそうにしてたよ。タローいつまでいるの？

王子 この三日干しが無事終わりました暁には、くにもと国許へ帰る所存にございます。

森田 バイトさんが帰っちゃうまでか。三日でお別れなんて寂しいな。

桃子 あたしともお別れだよ。

森田 んー？

桃子 ちなみにこの人はバイトさんじゃなくて、あたしを迎えに来てくれた王子様なの！

N 森田は作業を続ける王子をあらためてじっくり眺めた。

森田 ……ほんとだ。王子様の格好してる。

桃子 格好だけじゃないよ。本物の王子様だよ。

森田 さすがだなあ、キヌさん。本物の王子様をバイトに雇うなんて。

キヌ そうねえ。こんなに暑い中お手伝いしていただいたら、お給金をお出ししないと申し訳ないわね。

桃子 森田に話を合わせないでください！

王子 大切な儀式への参加が叶いましたことだけで、わたくしはもう充分に……。

森田 平気平気！ キヌさんお金持ちだから！ この町内だけでいくつアパート持つてるかバイトさん知らないんでしょう？

桃子 いいかげん「バイト」から離れろ！

N 森田が王子からやや離れる。

桃子 そういう意味じゃないの！ この人はバイトさんじゃないって言ってるのがまだわからんか！

キヌ 桃ちゃん、手元がお留守になっていきますよ？

桃子 はい……。あのね、森田。この三日干しが終わったら、あたしは王子様についていっっちゃうの。

森田 タローも？

桃子 ……あたしより馬が気がかりなんだ……。

森田 (王子に) だったらその間、タローはここに置いていけば？ オレ、ちゃんと面倒みてあげるから。

桃子 あたしは馬の代りにお供するわけじゃないよ！

王子 お気持ちは有り難いのですが、アロー号を置いて参りますわけには……。

森田 じゃあオレも行くかな。有休全然残ってないけど。

キヌ 森田君。桃ちゃんは遊びに行くのではなくてよ。

森田 なに？ 出稼ぎ？

キヌ お嫁にゆくだよ。

森田 オヨメ？

桃子 あたし、この王子様と結婚するの。

森田 ……。ふーん

桃子 ふーん……だけ？

森田 (桃子の肩を力強く叩き) やったな桃ちゃん！ 玉の輿じゃん！

桃子 (拍子抜けして) ……。そうなんだよ。ありがとう……。

森田 なにかお祝いしなくちゃいけないな。お手頃な新居でも探してあげようか？

桃子 王子様には立派なお城があるから心配ご無用。(王子に) お城、ありますよね？

王子 ございます。

桃子 (得意げに森田に) あるんだよ。

森田 そうだよねえ。王子様だもんなあ。

N 森田が三人につられてなにげなく梅干しをざるに並べ始める。

キヌ 森田君、手は洗ったの？

森田 洗ってない。

キヌ お手伝いしてくださるなら洗っていらしてね。お馬さんのお世話をしていた  
のでしょう？

森田 いけね。

N と、自分の触った梅干しを口に頬張る森田。

キヌ そしてこの梅干しはまだ召し上がらないで。

森田 (身悶えしながら) うおーっ！ しよっぺー！ キヌさん、なんか飲み物な  
い？

キヌ 冷蔵庫に麦茶がありますよ。

森田 麦茶！ 麦茶！

N そう叫びながら、森田は母屋の中へ駆け込んで行く。

王子 大変愉快な方でいらっしやいますね。

桃子 ずいぶん素直に喜んでくれちゃって……。

キヌ ……桃ちゃん、森田君と知り合ってどのくらい？

桃子 三年ですが。

キヌ 三年もおつきあいしていて、わからない？

桃子 何度も言いますがおつきあいなんてしていませんよ。あんな小学生のような  
彼氏のごめんです。

キヌ (ため息) なんにもわかっていないわよ。

桃子 なにがですか？

キヌ あの様子では、桃ちゃんの言ったことをなにひとつ真に受けていないはず。

桃子 ……なにひとつ？

キヌ (深くうなずき) 賭けてもいいわ。

N 同じ日の夜。梅御殿の母屋で四人が食卓を囲んでいる。

森田 (部屋中に響き渡る大声で) えーっ！ほんとに結婚すんの？

N キヌ、桃子、王子の三人は、それぞれ森田に吹き飛ばされたご飯粒を取り除く。  
キヌ 森田君……お口にものが入っている時にお喋りするのは控えましょうね。

森田 すいません。あ、王子様、前髪に一粒ついてるよ。

桃子 ほんとになにひとつわかってなかったんだ……。

森田 くだらない冗談かと思った。

桃子 くだらないは余計なんだよ！ よかった、キヌさんの賭けにのらなくて。

キヌ 全財産賭けてもよかったわね。

森田 (王子に) でもなんで？ なんでよりによって桃ちゃんなんかと。

キヌ 王子様に失礼ですよ。

桃子 あたしに失礼なんです！

王子 わたくしの求婚を受けてくださったのは、桃子殿が初めてだからです。

森田 この人にお姫様なんか務まるわけないってひと目見ればわかるでしょう？

王子 人を見かけで判断してはいけないと乳母から厳しく躾られました。

森田 世の中には見かけ通りの人間だっているんだよ？

桃子 森田！ 明日も仕事でしょ！ 食べ終わったらとつとと帰りな！

森田 早めの夏休みをもらうから大丈夫。

桃子 大丈夫なのはあんただけなの！

森田 ということでキヌさん、オレも泊めてください。

キヌ それは構いませんけれど……。

桃子 キヌさんは構わな過ぎです！

森田 桃ちゃんには関係ないだろ？ オレはキヌさんに呼ばれたんだからね。

桃子 だったらあたしの幸せにいちいち口を出さないで。

森田 お姫様になつてなに不自由なく暮らすなんて幸せとは思えないけどなあ。桃

ちゃんみたいにな不自由な暮らしを好んでする人が。

王子 ご心配ただかずとも、王族には王族なりの不自由というものが……。

桃子 いいんですよ、不自由なんてない方が。(森田に) 人を好きで貧乏してるみた

いに言うな！

森田 だったらなんでいつまでも怒ってるのさ。



桃子 そうだ。森田とはもう口をきかないんだった。

キヌ 森田君は桃ちゃんを怒らせるのが本当にお上手ねえ。

森田 (照れくさそうに) そうかなあ。

桃子 …… (キヌに) 褒められたと思ってますよ？

キヌ なんでも前向きに受けとめるのはよいことよ。

王子 なにをそれほどまでに怒っていらっしやるのですか？

桃子 あたしの仕事をバカにしたんです。

森田 してないよ。

桃子 したでしょうが！ (キヌに) 三丁目の雑貨屋さんにスカーフ卸してたの知ってますよね？

キヌ あの奇抜な柄の絞り染めでしよう？ 珍しく完売したって喜んでいたわね。

桃子 こいつが買い占めていたんです！

王子 それのなにお気に障ったのでしょうか？

森田 ねえ？ 王子様もそう思うでしょ？

桃子 あたしの作品なんて誰も欲しがらないって思ったからでしょう？ 要するにあたしの仕事を認めてないってことじゃない！

森田 オレはただ桃ちゃんがスカーフ売れなくてしょげてたから、ボーナスも出たことだし、ちよつと奮発して……。

桃子 同情なんて真つ平なの！ 第一どうして森田なんかボーナスが出るのよ！

森田 (王子に) こんな怒りん坊のお姫様でほんとにいいの？

桃子 おまけにこいつは買い占めたそのスカーフを全部……。

キヌ ご近所のお犬さんたちにプレゼントしたのね……。

桃子 ……ご存じだったんですか？

キヌ 青木さんの御宅のコロちゃんがお首に巻いているのを見かけたわ。

桃子 よかれと思つてなさつたことでしょう。桃子殿のためにも、犬たちのためにも。

桃子 皮膚病になった犬もいるそうです……この暑いさなかに森田が無理やりスカーフを巻きつけたせいだ！

キヌ それでもコロちゃんは気に入っているふうでしたよ。そんなにいきり立つことないわ。相手は他でもない森田君じゃないの。

桃子 森田だから許せと言うんですか？

キヌ 許すも許さないも……。

王子 お話中のところ失礼いたします。……渦中の森田殿は……すでにお休みの様子ですが……。

N 森田、箸を握りしめたまま眠っている。

キヌ ……怒るだけ損ではないかしら……。

N 寝具の敷かれた客間に蚊帳を吊っているキヌ。そこへ、ややつんつるてんの浴衣を着た王子が入ってくる。

王子 結構なお湯を頂戴いたしました。

キヌ (王子の浴衣姿を見て) やはり丈が少し足りませんでしたわね。父のお古しかご用意できずに申し訳ないことでございます。

王子 滅相もない！ こちらこそ、なにからなにまでお世話をかけどおしで……。

あの……森田殿は、あのままお起こしせずともよろしいのでしょうか？

キヌ 風邪をひくような季節でもございせんから。

王子 桃子殿もそう仰って、ご自分のお部屋に戻りましたが……。

キヌ 後ほど声をかけてみますわ。

王子 ……森田殿は、わたくしたちの結婚を、快くは思っていない様子でしたね……。

キヌ 突然のことで驚いているのでしょうか。

王子 桃子殿のことを、好きなのではないでしょうか？

キヌ さようでございますねえ。なにしろ森田君にとっては、犬猫を除けば桃ちゃんが一番のお友達でしょうから。

王子 お友達以上の強いつながりを感じました。大切なお話の最中に、すやすやお休みになられてはいましたが……。

キヌ 森田君のことは誰にも計り知れませんので、あまり深くお考えにならない方が……。大事なものは桃ちゃんの気持ちでございませう？

王子 仰る通りです……。私も結婚を控えてマリッジ・ブルーになっておりますのでしうか。

キヌ そうかもしれませんわね。

王子 キヌ殿も、このような不安なお気持ちになられましたか？

キヌ あいにく私には結婚の経験がございませんもので。

王子 (驚いて) 船乗りのご主人を嵐の海で亡くされたのでは？

キヌ ……一体どこからそのような物語を描かれました？

王子 なにかそういった経緯いきわづらひがおりなのかと思ひ込んでおりました……。しかしあなた様のように美しいお方が、なにゆえに……。

キヌ 御縁がなかったとしか申し上げられせんわね。

王子 信じ難いことです……。

キヌ 人それぞれ様々な人生がございますわ。そのように大きなお目を見開いていらつしやらないで、どうぞゆっくりお休みくださいませ。

N 翌日。離れの前にいる桃子、森田、王子の三人。桃子は鉋なたで次から次に木の枝を叩き割っている。

桃子 とにかく半端じゃない数の男たちが結婚を申込んだらしいですよ？

森田 オレも大家さんたちから聞いたことあるよ。一時は梅御殿の前に行列ができただって。

王子 それでもお眼鏡にかなう殿方がいらつしやらなかったのでしょうか？

桃子 ご両親が一人娘を手放すのを嫌がったって話も聞きましたけど……。

森田 大勢過ぎてどうでもよくなっちゃったんじゃない？ ほら、定食屋とかでもさ、あんまりメニューがたくさんあるとなに食べたいかわかんなくなったりするでしょ？

桃子 定食屋のメニューと結婚相手を一緒にしないで。

森田 一番気に入ったのを選ぶのは同じだろ？

王子 ……キヌ殿も、人生の伴侶には本当に愛する方を選ぶようにと仰っておられましたけど……。

森田 ちなみにオレが本当に愛してるのはサバの味噌煮定食ね。

桃子 うん、わかった。森田はサバ味噌と結婚すればいいよ。

王子 ……お二人は、すっかり仲直りなさったんですね。

桃子 絶交をやめただけです。

森田 オレたち絶交してたの？

桃子 ……このように相手に自覚がない場合、エネルギーの無駄遣いですから。どっちにしても明後日にはこのすつとこどつこいともおさらばですしね。

森田 まだお姫様にしてもらおう気にいるんだ？

桃子 ……森田。あたしが今、刃物を持っているのが目に入らない？

森田 凶器を手に人を脅すような野蛮人の分際で？

桃子 また絶交されたいか！

王子 先ほどから、桃子殿はなにをなさっておられるのですか？

桃子 秋に落した紅梅の枝を細かく割いているんです。これを煮出して染料を作るんですよ。ほら、幹の芯が紅くなっているでしょう？

王子 確かに。

桃子 つぼみをつける前の枝からは華やかな色が出るし、花の後では陰が出て奥深い色になるんです。草木染めは季節や条件によって微妙に表情を変えるから、なかなか思う通りにはいかないんですけどね。

王子 繊細なお仕事ですね。

森田 桃子ちゃんは全然繊細じゃないけどね。

桃子 あんたなににきたのよ！ 繊細な仕事の邪魔だからあっちいけ！

森田 そうだ、王子様。タローに乗って散歩したいんだけどいいかな？ 梅御殿の外には出ないから。

王子 どうぞご遠慮なく。アロー号も喜ぶことでしよう。

森田 やった！

王子 ではわたくしもお仕事のお邪魔にならぬよう退散いたします。

桃子 王子様はいいんですよ？

王子 梅干しの様子を見てまいります。

桃子 さつきひっくり返したばかりだから大丈夫だと思いますけど……じゃあ、これに火をかけたらあたしもすぐ行きますね。よっこいしょっと。

N 桃子は大量の枝を両手に抱えて離れの中に入って行く。

森田 あんたたくましい後ろ姿を見ても、まだ気が変わらない？

王子 森田殿は、わたくしたちの結婚に反対のお立場でいらっしゃる……。

森田 オレは二人のためを思ってるんだよ。

王子 ……ご自身はいかがですか？

森田 オレ？

王子 桃子殿がいなくなったら、どのようにお感じになりますか？

森田 桃ちゃんがいなくなったら？ そうだなあ……まず材料集めの草むしりにつきあわなくてよくなるでしょう？ 定食屋でおかずを横取りされる心配もなくな

って、ガミガミ怒鳴られなくてすんで、家賃を滞納しないちゃんとした店子をキヌさんに紹介してあげられて……。

王子 ……良いこと尽くめなのですか？

森田 それから……つまんなくなるな。

王子 つまらない……？

森田 うん。つまんなくなるよ。梅御殿も静かになっちゃうし。

王子 そうですね……。

森田 とにかくよく考えた方がいいよ。オレもさつきはああ言ったけど、実はまだ迷ってるんだよね。

王子 ……迷っているとは……もしや……。

森田 サバの味噌煮も確かにいいんだけどさ、豚の生姜焼きも捨てがたいなと思つて。

王子 ……左様でございますか……。

森田 じゃあ、タローと散歩にいつてきまーす！

王子 いつてらっしゃいませ……。

8

桃子 あれ？ 王子様は？

キヌ こちらにはおみえになっていないわよ？

桃子 梅干しの様子を見てくるって言ったのに。

キヌ 丁度とうもろこしが茹であがったところだからお呼びしてちょうだい。森田君はお馬さんのところ？

桃子 あいつは放っておいても匂いを嗅ぎつけて寄つて来ますよ。

キヌ もう少し森田君に優しくしてあげてもよろしいのではなくて？ もうすぐお別れなんですもの。今までずいぶんよくしてもらった感謝の気持ちもおありでしょう？

桃子 森田よりもあたしはキヌさんに感謝したいです。

キヌ あら、私に？

桃子 身寄りもお金もないあたしが、こんな素晴らしい梅御殿でこんな美人と楽しく暮らせるなんて夢みたいでした。

キヌ それは私も同じですよ。だったらなおのこと、森田君に感謝しなくてはね。

桃子 そうですかあ？

キヌ 桃ちゃんをここに連れてきてくれたのは森田君なのよ？ 今でも忘れられないわ。あの時の森田君の笑顔。「犬みたいにかわいい借り手がみつかった」って、それは嬉しそうだったのよ。

桃子 「犬みたいに」は余計ですけどね。

キヌ 森田君にしてみれば、最高の褒め言葉ではなくて？

桃子 とにかくまずはキヌさんになにかお礼をさせてください。ひとつ肩でも揉みましようか？ あたし、肩が凝らないのでどこをどう揉めば気持ちいいのかさっぱり見当が付きませんけど。

森田 大変、大変！ 王子様が倒れちゃった！

9

キヌ 気が付かれました？

N 客間に寝かされていた王子が目を覚ます。

王子 わたくしは一体……。

桃子 梅林の中で倒れてたんですよ。日射病です。帽子もかぶらずに、あんなところまでなにしてたんですか？

王子 少しばかり考え事を……。

森田 タローが教えてくれたんだよ。ここまで王子様を運んだのもタローだからね。やっぱりあいつは賢いなあ。ご褒美にとうもろこしをあげといたよ。

キヌ さあ、これをお飲みになってください。

N 王子は差し出された湯のみを受取り、少し飲んでやや顔をしかめる。

キヌ 梅干しの黒焼きを煎じたものでございます。お薬ですので格別おいしいものではございませんけれど。

王子 恐れ入ります。(ふとこめかみに手をやり)……これは、なにが貼りつけられておりますのでしょうか？

キヌ それも梅干しでございます。熱と痛みが和らぎましてよ。

王子 梅干し様にも皆様にも多大な恩恵を授かるばかりで……情けない限りにございます。います。

桃子 長旅のお疲れが出たんですね。

森田 夏バテじゃない？ ここ、冷房入ってないしね。

N 森田がうちわでバタバタとせわしなく王子を扇ぐ。

キヌ 森田君、さんまの塩焼きではないのだから……。

N キヌは森田からうちわを受取り、優しい風を王子に送る。

森田 じゃあオレ、タローに報告してくるよ。王子様、目を覚ましたから安心な  
つて。

N そう言って、勢いよく立ちあがった途端、派手によろけて床の間に転がる森田。

桃子 なにやってんの？

森田 足が痺れた……。

キヌ お怪我はなかった？

桃子 掛け軸、破いてないでしょうね！

森田 (掛け軸を点検して) 大丈夫。オレも掛け軸も。

N その掛け軸をじっと見つめていた王子が、そこに書かれた書を読み始める。

王子 「東風吹かば にほひをこせよ梅の花 あるじなしとて 春を忘るな」。……

菅原道真の歌でございますね。

キヌ まあ。そんなお勉強までなさいましたの？

森田 スガワラノミチザネって誰？

桃子 学問の神様になった大昔の偉い人。

森田 そうなんだ。(王子に) マニアックなこと知ってるんだね。

桃子 あんたがなんにも知らなさ過ぎるんだよ。

王子 偶然目にしたものが頭の隅に残っておりまして。美しくも切ない歌だと感銘  
を受けた覚えがございます。

キヌ 道真が大宰府に左遷される際に詠まれた別れの歌でございますわ。「東風が吹  
いたら、私の行く筑紫に、風に託してその香りを送り届けておくれ梅の花よ、た  
とえ主人がいなくなっても、花の咲く春を忘れるなよ……」梅をこよなく愛した  
道真の邸宅は、紅梅殿と呼ばれていたそうです。同じく梅を愛した私の父が好き  
だった歌ですの。

桃子 あたしもここを離れる時は、そんな気持ちになるだろうな。

森田 王子様の国には梅の木ってあるの？



王子 梅の木も梅干しも、こちらで初めて拝見しました。

森田 (桃子に) 梅の木も梅干しもないってさ。やっぱり行くのやめとけば？

桃子 あんたはなんの権利があつて邪魔するわけ？ 二十代のうちに結婚できる最後のチャンスだつていうのに！

森田 ……二十代のうちに結婚したかつたんだ？

桃子 当たり前でしょう！ ねえ？ キヌさん。

キヌ さあ、私はむしろ三十歳になった時、これで周りもすっかり諦めてくれるだろうと清々しい気持ちになつたような覚えが……。

森田 (桃子に) 当たり前じゃないじゃん。

桃子 同意を求める相手を間違えたの！

森田 二十代のうちになんて、そんなのただの迷信でしょ？

桃子 結婚したいのはあたしなんだからなんでもいいの！ 大体、迷信でなんだよ！

キヌ そんなに騒がしくしては王子様がお休みなれないでしょう？ 桃ちゃんはお仕事途中ではなくて？ 森田君も、お馬さんのところへ早くご報告にいつてらっしゃい。

桃子 王子様、森田の言うことなんて気にしないでくださいね。

森田 (痺れの残る足でよろよろしながら) お大事にー

N 桃子と森田が立ち去ると、後には蝉の声だけが響き渡る。

キヌ 本当にあの二人は。まるで子犬がじゃれあっているようで。

王子 桃子殿をお連れしてしまうと、寂しくなられてしまいますね。

キヌ 一人には慣れておりますわ。

王子 ……キヌ殿は、定食屋でサバの味噌煮をみつけるおつもりはなかったのだから、ご迷惑ですか？

キヌ ……。大変申しあげにくいのですが、ご質問の意味が……。

王子 ……森田殿の例え話を拝借してみましたのですが……。

キヌ それはあまりお勧めできませんわ。

王子 つまり……ご結婚をお考えになられたことは、一度もおありでなかったのか

と……。

キヌ 幸か不幸か、この梅の園を捨てても添い遂げたいと思う方には、巡り合うことが叶いませんでした。

王子 (庭を眺め) 確かにここは、離れがたく美しい場所です。

キヌ 冬になれば蕾のほころびを、春になれば青い実の熟れる時を、夏には梅干しを干す暑い日を……心待ちにして季節を重ねるうちに、とうとうこのような梅干し婆さんになってしまいました。

王子 (ガバと起き上がり) なにを仰います！ キヌ殿は私の知る限り、最も美しく聡明なご婦人であらせられます！

キヌ そのように興奮なさってはいけません。少しお眠りなさいませ(と寝かしつける)

王子 (寝かされながらも鼻息荒く) お世辞などではございません。

キヌ お顔が赤くなっておいでですよ。お熱がおありなのかしら。

王子 千人ものご婦人方とお会いしたわたくしが申しますのですから、確かなことにございます。

N キヌは王子のおでこにそっと手を当てる。

キヌ 王子様は、お優しい方ですね。

王子 わたくしはただ真実を……。

キヌ たったお一人でお国の運命を背負われて、九九八人ものお嬢様たちからつれなくされて、どんなにかつらい思いをなさったでしょうに、よくぞその温かいお心を失わずにいてくださいました。桃ちゃんは幸せです。こんなお優しい方と巡り合うことができて。

王子 ……キヌ殿こそ……お優しい手をしておいでです……。

ろ。

桃子 王子様、あまり根を詰めちゃダメですよ？ 病み上がりなんですから。

王子 今朝いただいた梅干しのおかゆですっかり回復いたしました。

桃子 梅干しフルコースが効いたんですね。

キヌ (ずらりと並んだ梅干しを眺めて) だいぶ良いお色になってきたこと。今年も美味しい梅干しができそうね。

桃子 「王子様印」をつけて高値で売りに出しましょうか。

キヌ またそんな世知辛いことを。

桃子 だって王子様が干した梅干しなんて世界中どこを探したってありませんよ？

王子 (辺りを見回し) 今日は、森田殿のお姿をお見かけしませんか。

桃子 きつと「タロー」のところですよ。すっかり情が移って一時たりとも離れたくないようでしたから。

キヌ そう言えば昨晚も東屋で、しきりにお馬さんを相手になにか話し込んでいましたよ？

王子 私も世界中の言葉を学びはいたしましたが、如何せん馬の言葉までは……。

桃子 さて！ ひと段落ついたところで、梅染めの続きをやってきます。

王子 見学してもよろしいでしょうか？

桃子 あー、王子様はやめておいた方がいいかも。これから媒染液を作るんですよ。

王子 バイセンエキ？

桃子 布に染料を定着させる液体のことです。染料を煮出した後の枝を灰にして溶かすんですけど、まずは枝を燃やさないといけないから、真夏には地獄の作業なんです。

キヌ またお加減が悪くなってもいけませんし、明日のご出発まで体力を温存なされた方がよろしいかと存じますよ？

桃子 それに汗だくで火をおこしている姿はかなりお見苦しい恐れがありますので。

王子 では残念ながらご遠慮申し上げます。

桃子 布を染める時になったら見に来てください。華麗な手さばきをご披露しますから！

N タオルのねじりハチマキに軍手という格好で、ドラム缶に入れた枝を燃やしている桃子。汗にまみれた予告通りの見苦しい姿で、懸命に火吹きを吹いている。

桃子 (汗をぬぐい) ふう。やっぱり王子様呼ばないで正解だったよ……。

N そこへ白馬に乗った森田が姿を現す。

森田 ……。風呂上り？

桃子 汗だよ、汗！

森田 一人我慢大会だね。

桃子 ええ、そうですとも！ あんたはいいねえ。王子様気取りで優雅に馬とお散歩？

森田 ……そうやってワンワン吠えてるとほんとに桃太郎そっくりだな。

桃子 誰がワンワン吠えてるのよ！

森田 桃ちゃんは、三十歳になる前に結婚したいんだよね？

桃子 まあね。

森田 もう時間ないよね？

桃子 来月、誕生日だからね。

森田 じゃあ結婚しちやえば？

桃子 言われなくてもするっーの。

森田 オレとだよ？

長い間。

桃子 ……あんたと？

森田 うん。

桃子 あたしが？

森田 そう。

桃子 結婚!?

森田 火、消えかかっているよ?

桃子、慌てて火吹きを吹く。

森田 もっと焚き木を増やした方がいいんじゃない?

桃子 森田……。自分がなにを言っているかわかっている?

森田 オレ、ボーイスカウトに入ってたから、焚き火にはちよつと詳しいんだ。

桃子 明日嫁いでいく人間にプロポーズしてるんだよ?

森田 ああ、そっちの話か。

桃子 ……悪い冗談につきあっている暇はないから。

森田 なんでオレが冗談で結婚しなくちゃなんないのさ。

桃子 それはこっちのセリフなの! 大体、あんた一度だってそんな素振り見せたことないじゃない!

森田 そりゃそうだよ。結婚なんて今まで考えたことないもん。けどどうしようがないだろ?

桃子 なにが「しようがない」だ! イヤなら結婚なんて申し込むな!

森田 だってこうでもしなきゃ、桃子ちゃん遠くに行っちゃうじゃん。

桃子 ……あのー、森田が言っているのはアレだね? ほら、幼い弟が、お姉ちゃんのないくなる寂しさから「僕がお姉ちゃんと結婚する!」っていう……。

森田 オレはここが好きなんだよね。

桃子 人の話、全然聞いてないね?

森田 イヤなことがあった時、梅御殿のことをぎゅうつと強く思っただけでやり過ぎすんだよ。ここに来れば、いつでも楽しい自分に戻れる、梅御殿で桃子ちゃんと、花見したり梅の実もいなり飯食ったりすれば、とにかくオレは大丈夫だからって。

桃子 ……御守りみたいなもんだね。

森田 桃子ちゃんがいなくなったら、多分、効き目はなくなっちゃうけど。

桃子 キヌさんじゃダメなの？

森田 キヌさんはお上品だからさ、一緒にいてもそんなに力が沸いてこないんだよ。やっぱり桃ちゃんくらいの荒っぽさがないと。

桃子 ……。森田……ごめん。

森田 謝ることないよ。荒っぽいのは生まれつきでしょ？

桃子 そうじゃなくて……。

森田 ……今オレ、断られたの？

桃子 あたしも森田といるのはすごく楽しい。時々頭にくるけど、そのとんちんかんなところも気に入ってる。あたしをこれほど気楽にさせてくれるのは、あんなにしかないと思う。……でもやっぱり結婚する気にはなれないよ。

森田 オレもそんな気になったのは昨日の夜だからな。

桃子 王子様も、あんなに喜んでくれてるし……。

森田 ……わかった。タロー、いくぞ？

N 馬を方向転換させた森田は、ふとドラム缶に目を止める。

森田 火、消えちゃったよ？

桃子 ……ほんとだ……。

森田 仕事の邪魔してごめんね！

桃子 (去っていきこうとする森田の後ろ姿に) 森田！

森田、振り返る。

森田 ん？

桃子 ……遠くからだって、守ってやるよ。

森田 ……。ありがと。

N 白馬に乗った森田が、ゆっくりと桃子から遠ざかっていく。

桃子 まずはおろかじめ下処理しておいた布を、媒染液に浸けます。

N 離れで染めものをしている桃子のかたわらで、王子が熱心にその作業を見つめている。

桃子 で、これを水で濡らしてから染液の鍋に入れる。

王子 なるほど。

桃子 少しずつ温度を上げていく間も、こうして休まず布を揺らし続けます。ムラ染めになつてはいけませんから。

王子 布を持つ手と共に、そのように腰も振り続けるのが要なのでございますね？

桃子 これはただの癖です。仕上がりに関係ありません。

王子 余計なことを申しました。

桃子 そして様子を見ながら、また媒染液に浸けて水洗いする。これを何度もくり返して、徐々に濃い色に染めていくんです。

王子 わたくしは梅の花というものを拝見したことがございますが、このように美しい紅の花が咲くのでしょうか？

桃子 花の頃に来ていただけなかったのが残念ですよ。梅御殿のあの緑が一面の白とピンクに変わるんですから。あたし、冬は苦手だったんですけど、ここに来てからは二月が来るのが楽しみです。

王子 ……申し訳ないことでございます。

桃子 え？ なにが？

王子 美しい花の季節を待たず、遠く梅のない国へお連れすることになりました。

桃子 でも幸せにしてもらえますから。梅干しの神様にもそうお願いしてくれたでしょう？

王子 はい！

N 桃子はにっこりと微笑んでから、鍋の中を覗きこんだ。

桃子 あんまり濃くしない方がいいかなあ。キヌさんは淡い色が好きだから。

王子 それはキヌ殿に差し上げるのですか？

桃子 今までお世話になったお礼にね。あたしにはこんなことしかできないもんで。

そもそもこの布だってキヌさんに恵んでもらったんですけど。

王子 きつとお喜びになられましょう。

桃子 昔の人は薬草で染めた衣をまとうことで身を守ったそうなんです。梅が体にいいのは王子様ももうご存じでしょう？ キヌさんにはいつまでも健康で長生きしてほしいから。

王子 その長い布はお着物でしたか。

桃子 ……フンドシらしいんですよ。果たしてキヌさんが身につけてくれるかどうか……。

そこへキヌが入ってくる。

キヌ お仕事のところごめんなさい。森田君がお買物に出るそうだから、ついでお願いしようと思うのだけれど、今晚なにか召し上がりたいものはあつて？

桃子 リクエストをきいてもらえるんですか？

キヌ ご一緒できる最後のお夕食ですからね。王子様も、なにかご希望があたりでしたら。

王子 ではわたくしは、梅干しのおむすびを……。

桃子 なにを言ってるんですか！ こういう時に普段口にできないものを頼まないでどうします！

王子 普段、口にできないものと申されますと？

桃子 たとえば、すき焼きとか……。

キヌ おむすびとすき焼きですね。(きつさと離れを出ていく)

桃子 あくっ！ まだすき焼きって決めたわけじゃあ……！

N その日の夜。すき焼きやらおむすびやらの夕食を片付け終えた一同が縁側でく



つろいでいるところへ、森田が山のような花火を持って来る。

森田 それではこれより、納涼花火大会を開催します！

キヌ またずいぶんとたくさん買い込んだこと。

森田 線香花火から打ち上げ花火までなんでもあるよ？ 王子様、どれにする？

王子 (違いがよくわからないままに) それでは……これを。

桃子 それ、ロケット花火ですよ？

N それぞれ花火を楽しむ四人。王子は次々に火をつけられる花火に、いちいち驚いたり感心したりしている。

王子 なんとも楽しく華やかな遊びでございますね。

森田 花火やったことないの？ じゃあちよつとこつち来て！

N 森田が母屋から離れた場所に王子を呼び寄せ、ねずみ花火に火をつける。

森田 ほら！

王子 (しゅるしゅしゅるとまわる花火に驚き) わーっ！

森田 あははははは！

キヌ ……森田君、必要以上に楽しそうね。

桃子 ……昼間、プロポーズしてきましたよ。

キヌ そう。

桃子 驚きませんね。

キヌ 桃ちゃんと離れたくなければ、そうするより他ないでしょう。

桃子 本人もそう言っていました。しょうがないからって。

キヌ お別れするのがよほど嫌だったのね。

桃子 なにを考えているんだか。

キヌ 桃ちゃんとはずっと一緒にいられると信じていたのでしよう。疑ったことなんてなかったのよ。

桃子 森田には想像力がありませんからね。

キヌ それで？

桃子 ……それでって？

キヌ お断りになったの？

桃子 OKする理由がありません。なにより婚約者のいる身ですし。

王子 (逃げてきて) あの花火は生きております!

森田 そろそろでっかいのいってみようか。

N 森田が打ち上げ花火に火をつける。

大きく打ち上がった花火の音。

桃子 た〜まや〜!

森田 今の音でタローが怖がってるかもしれないな。ちよつと様子見てくるね。みんなは花火続けてて。

桃子 (使用済みの花火がつけられたバケツを見て) あ! バケツがいっぱいだ。

新しい水汲んできます。

N ぼつんと残された王子とキヌは、二人で線香花火を始める。

王子 ……お恥ずかしいところをお見せいたしました……。

キヌ ねずみ花火のことですか? 私もあれは苦手でございますのよ。いつこちらに向ってくるか見当がつきませんもの。

王子 ……わたくしは……もつと強い人間になれるでしょうか。

キヌ もちろんですとも。強くなるうというお気持ちさえおありなら。

王子 ……では、わたくしは強くなります!

キヌ 結構なお心掛けでございます。

王子 今度ねずみ花火が現れた時には、きっとキヌ殿を守って差し上げます!

キヌ ……もつといたいなお言葉ですわ。

N 井戸にやってきた桃子。すぐ先の東屋では、森田がしきりに馬に話しかけてい  
る。

桃子 また馬と喋ってる。

森田 (馬をなでながら) ……だからね、おまえがしつかり守ってやるんだよ? い  
くら桃ちゃんががさつで無神経だって、誰も知らない外国じゃ、やっぱり心細い

だろ？ 王子様はいい人だけど、ちよつと弱虫なところがあるからさ。わかったな？  
タロー。もう一度言うよ？ 桃ちゃんのこと、くれぐれも頼んだぞ？

N 井戸から水を汲む手を止めて、じつと立ち尽くしている桃子。

N 翌日。三日三晩干された梅干しを詰めた甕が、無事に土蔵の棚に納められた。

キヌ これですべての作業が終了でございます。みなさん、三日間本当にお疲れ様  
でございます。

桃子 これであたしも心置きなくお嫁にいくことができます。

キヌ こちらはお土産用として別に詰めておいたものよ。蓋はしっかりとめてあり  
ますからね。

N そう言つて、キヌが大きな丸い缶を桃子に手渡す。

桃子 王冠のマークがついてる。

キヌ いただきもののクッキーが入っていたのだけれど、丁度よろしいでしょう？

王子様印の梅干しですもの。

桃子 ありがとうございます。

キヌ 半年はこのまま置くようになさいね。本当においしく召し上がれるのは三年  
後ですけれど。

桃子 梅干しは欠かしたくないので古いのもいただいていいですか？

キヌ もちろんよろしくよ。

桃子 そのつもりでタッパーをたくさん用意してきましたんです。まずはキヌさんと初  
めて漬けた三年ものとおとしと去年のも、あと十年もののも……。。

N 桃子は次々に甕を開けて、タッパーに梅干しを詰め始める。

キヌ ……まるで梅干しの行商に行くようね。

N そこへ土蔵の奥から森田が古いアルバムを持ち出してくる。

森田 ひゃーっ！ ちよつと見てこれ！

キヌ まあ、そんなものを引っ張り出して。

王子 森田殿、お髪くまに蜘蛛の巣が……。

森田 キヌさん、若ーい！ 女優さんみたい！

桃子 ほんとだ！ ほら、王子様も見てくださいよ。目が眩くらむ美しさですから。

王子 (覗き込んで) ……わたくしは、今のキヌ殿の方がお美しいと思います。

キヌ あら、お上手ですこと。

森田 (ページをめくり) あ！ これ桃ちゃんが引っ越して来た時撮ったヤツだ。

キヌ この頃の桃ちゃん、こんなにお痩せさんだったのね。

桃子 ここに来るまではろくなものを食べていませんでしたからね。

王子 ずいぶんと精巧に描かれた絵でございますね。

桃子 これは絵じゃなくて写真ですよ。

王子 シャシン？

森田 写真撮ったことないの？ じゃ今から記念撮影しようか。桃ちゃん、ポラロイドカメラ持ってたよね？

N 記念撮影のために庭に出てきた四人。森田は脚立の上にカメラを乗せて準備している。

森田 まずは集合写真からね。

桃子 でもそのカメラ、セルフ・タイマーついてないから、全員で写るのは無理だよ。

森田 平気平気。タロー、ちよつと来て！

N その声に、白馬が森田のそばへ歩み寄ってくる。

桃子 ……嘘でしょ？

森田 いいか？ タロー。オレが「はい、チーズ」って言ったらこのシャッターを押すんだよ？ ここを押すだけだからね。おまえなら出来るよな？ (三人のもとに走って来て) じゃあいこうか。はい、チーズ！

N 白馬が森田の指示通りに鼻先でシャッターを押すと、カメラから写真が吐き出される。

王子 おお！ アロー号があのような魔法の機械を操るとは……。

森田 お利口だなあ、タローは。もう一枚ね。はい、チーズ！

桃子 あんた絶対サーカスに転職するべきだよ。

王子 （写真を手に取り）なんということでしょう！ 次第に私たちの顔が現れま  
した！

森田 次は桃ちゃんとキヌさんのツーショットね。

キヌ せっかくならきちんとお化粧をしてきた方がいいかしら。

桃子 これ以上あたしを引き立て役にしないでください。

森田 （カメラを構えながら）いいですよ。美女と野獣って感じ！

桃子 誰が野獣だ！

森田 オレがタローに乗ってるところもカッコよく撮って！

桃子 カッコ悪く撮ってやる！

桃子 長い間、大変お世話になりました。

N いやいよ出発の時。大きな風呂敷包みを担いだ桃子は、キヌに深々と頭を下げ  
た。

キヌ こちらこそ、今日まで本当に楽しかったわ。

桃子 これ、梅の木で染めてみたんで……。

N 桃子が薄紅色に染まったフンドシをキヌに差し出す。

キヌ あの下帯ね？ 綺麗なお色に染まったこと。これを私に？

桃子 梅の色がいつまでもキヌさんを守ってくれるように、無理を承知で肌身につ  
けていただければと……。

キヌ 寒くなったら腹巻にでもいたしましょうね。ありがとう。

王子 （桃子に）お荷物をお預かりいたしましょう。

森田 オレがやるよ。なんなのこのデカくて重い風呂敷包み。タローがかわいそう

じゃん。

桃子 寸胴鍋やら鉋やら、染物の道具を一式ね。あとは梅干しとか梅干しとか、梅干しとか……。

森田 やつぱり嫁入りっていうよりは行商だね。

N 森田が風呂敷包みを馬の背に乗せた途端、白馬が荷物を振るい落とす。

王子 アロー号！ なんと無礼な！

森田 どうしたんだよ、タロー。これはね、唐草模様だけど別に盗んだ物じゃないんだよ？

王子 このように聞き分けのないことなど今までなかったのかもしれませんが……。

桃子 あたし、気に入られていないんでしょうか……。

森田 荷物が重くてびっくりしたんだよな？ ほら、もう平気だろ？

王子 森田殿には、アロー号共々、大変お世話になりました。

森田 うん。また三人でいつでもおいで。

王子 キヌ殿……。数々のお心遣い、誠にありがとうございました。この三日間の御恩、生涯忘れはいたしません。

N キヌが王子の右手をそつと両手で包む。

キヌ 道中どうぞご無事で。桃ちゃんのこと、くれぐれもよろしくお願いいたします。

N そう言って、キヌが手をほどこうとしても、王子はその手をいつまでも離さない。やがてうつむいたままのその頬から、ポロポロと大粒の涙がこぼれ落ちる。

キヌ ……王子様。何度も申し上げますが、殿方が泣いてもよいのは……。

王子 ……お許しただけははずです……。

キヌ はい？

王子 ……愛する人と別れる時は、泣いてもよいと仰ったはず……。

キヌ 王子様？

桃子 ……。なんか展開が読めた……。

森田 ……オレも。

王子 桃子殿！ 申し訳ございません！

N 突然、桃子の前に土下座する王子。

王子 ……この期に及んであるまじき非礼な振舞い、許されざることと覚悟の上で申し上げます！ わたくしの妃にはキヌ殿を……キヌ殿をお迎え入れしたく、伏してお願ひ申し上げます！

N 王子を見つめている桃子。やがて白馬に歩み寄り、その背から風呂敷包みの荷物而降ろしはじめる。

桃子 タロー…じゃなくてアローだっけ。あんた、わかってたんなら早く教えてくれればいいのに。

N 白馬が申し訳なさそうに小さく鳴く。

桃子 王子様。そういうことはあたしじゃなくて、本人に訊いてみなきやダメなんですよ？

王子 ……お許しいただけるのでございますか？

桃子 他の女を好きな夫なんて、たとえ王子様でもこっちから願ひ下げですよ。

森田 さすが桃ちゃん。男らしいなあ。

N 王子が改めてゆつくりとキヌの前にひざまずく。

王子 ……キヌ殿。あなたがお教えくださったように、わたくしは本当に愛する方と人生を伴にしたいと存じます……この切なる願ひをお聞き届けいただけるならば、これまでの労苦が報われてあまりある喜びでございます。

キヌ ……。桃ちゃん。

桃子 なんですか。

キヌ 遠い昔のことを、思い出してしまったわ。

桃子 昔のこと？

キヌ まだ子供だった頃、あの申年の梅干しを食べた時、私も桃ちゃんと同じことをお願ひしたのよ。

桃子 おんなじって、ひよっとして……。

キヌ (うなずき)「白馬にまたがった王子様が、いつか迎えに来てくれますように」

森田 ずいぶん待たせたね、王子様。

王子 かけがえのない姫君を今日までお守りくださった梅の木たちには、感謝の言

葉もございません。キヌ殿……お迎えに上がるのが遅くなってしまいました、わたくしのお妃に、なつてくださいますか？

長い沈黙。

キヌ ……桃ちゃん。

桃子 なんですか。

キヌ お嫁入り道具をありがとう。

N キヌはフンドシをひらひらと振った。

桃子 ついでに梅干しの詰め合わせもお譲りしますよ。他に要るものはないですか？

キヌ ええ。他にはなにも。

N 桃子は風呂敷の荷物をほどいて、梅干しのタッパーをキヌに手渡す。

桃子 「東風吹かば……」ですね。

キヌ 本当に。(ゆつくりと庭を見渡し)「東風吹かば、匂いおこせよ梅の花 あるじなしとて 春を忘るな」……。梅の木たちのこと、お願いしますね。

桃子 ご安心ください。

森田 不動産関係はオレにまかしといて。

桃子 ……あたしがよく見張っておきますから。

王子 桃子殿も森田殿も、末永くお元気で仲良くお暮らしく下さいませ。

桃子 仲良くの方は保証できません。

王子 さあ、アロー号！ 三国一の花嫁様をお連れして参ろうぞ！

N 白馬がいなくなくと、辺り一面が真っ白な霧に覆われる。

キヌ 桃ちゃん、森田君、ありがとう！ ご機嫌よう！

N 白馬に乗った王子とキヌが、霧の中に消えていく。

森田 バイバイ！ タロー！

桃子 タローじゃないってば……。



N 数年後の冬。梅御殿の母屋でこたつにあたっている桃子と森田。桃子はこたつ布団に首まで埋もれ、一方の森田も、雑誌を読みながらだらしなく寝そべっている。

桃子 森田、ストーブ消えちゃった。灯油入れてきて。

森田 寒いからヤダ。

桃子 なんだと。結婚してやらないぞ？

森田 別にいいもん。桃ちゃんだってもういいだろ？ 三十もとっくに過ぎちゃったんだから。

桃子 あたしにはそのうち新しい王子様が迎えに来てくれるんですよーだ！

森田 キヌさんくらいの歳まで待ってればねー。

桃子 うーん。その可能性は否定できないんだよなあ……。

N そう言つて桃子が寝返りを打つと、壁に貼られたあの日のポラロイド写真が目に入った。その中の一枚には、白馬にまたがった半目開きの森田が写っている。

桃子 ……あんたあの時、白馬にまたがってたよね……？

森田 ねえ、桃ちゃん、これ読んだ？「願い事をする時は、気をつけた方がいい。叶ってしまうかもしれないから」だってー。

桃子 (恐る恐る) あたしの王子様ってまさか……。

森田 ……タロー？

桃子 はあ？

森田 今、タローの鳴き声がしなかった？

N 森田はガバっと起き上がり、縁側のガラス戸を開け放つ。

桃子 寒い！ 森田、あんたその歳で呆けたんじゃないでしょうね？

森田 だってタローが帰ってった時も、こんなふうに辺りが真っ白に……。

桃子 白梅が咲いてるだけでしょ？

森田 ……なんだこれ？

N 森田がふと足元の縁側を見ると、そこには大きな壺が置かれている。

桃子 ……その壺、どこかで見覚えがあるような……。

森田 なんかでっかい赤い実が入ってるよ？

N 壺の蓋を開けた森田が、果肉をちよっぴりつまんで食べる。

桃子 またそうやってなんの迷いもなく不審物を口にする！

森田 ……酸っぱい。

桃子 腐ってるんじゃないの？

森田 そしてしょっぱい……。

桃子 ! 思い出した！

N こたつから飛び出した桃子が、キヌの部屋から土蔵で見つけた古い絵を持ってくる。そこには、王子によく似た王様と、キヌによく似た女王様らしき二人が、赤い果実のあふれんばかりに入った壺を仲良く手にしている様子が描かれている。

森田 おんなじ壺だ。

桃子 これ、王子様とキヌさんだったんだ……。

森田 キヌさん、あつちでも漬け物作ってるんだ。……ということはこれ、やっぱりタローが届けに来たんじゃない？

桃子 (辺りを見回し) もういないみたいだね。

森田 (庭に向って大声で) タロー! ありがとなー! 今度はゆっくり遊びに来ていよー!

桃子 せっかくだからこれ食べようよ。

森田 一個だけでもすごい食べ度がありそうだね。でもこれ、なんなのかな？

桃子 ……梅干しだよ。

森田 こんなでっかいのに？

桃子 酸っぱくてしょっぱいんでしょ？

森田 王子様の国には梅の木ないって言ってたじゃん。

桃子 王子様印の梅干しなの! いいから早く灯油入れてきて。

森田 じゃあオレお茶淹れるね。

桃子 灯油だよ!

森田 なんのお茶にする？

桃子 ……梅干しにはやっぱり……番茶でしょ。

おわり